咸臨丸太平洋横断航海150周年を迎えて⑬　明治を生きる幕臣たち

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

新しい時代の到来

江戸幕藩体制に終止符を打ち、明治という新しい時代を切り開いた維新の志士たちは、新政府の要職を次々と手にしていった。しかし彼らの多くが政治とは無縁な下級武士や公卿であったがゆえに、政権を握っても幕府勘定奉行のような国家の財政を動かすことの出来る人材はなかなか見当たらなかった。王政復古の新政府発足時に議定となった松平春嶽によって、財務担当に福井藩家臣三岡八郎（由利公正）が抜擢されたりしたが、それにしても広範囲にわたる人材不足は如何ともしがたく、やがて幕府で活躍した有能な官吏に出仕命令を出して実務に就かせ、新政府はやっと国家の体をなしていった。結局のところ、初期の明治政府はキャリア不足の高級官僚の下で、その屋台骨は多くの幕府有司が支えた、といっても過言ではない。

今回は最終回として長崎海軍伝習所出身の三人の幕臣が、明治時代をどのように生きたかを追ってみたい。

榎本武揚の生きざま

明治二年五月十三日、新政府軍陸軍参謀黒田清隆（薩摩藩）は箱館五稜郭の蝦夷政権総裁榎本武揚に対し降伏勧告を出した。すでに戦力差は明らかであったが、榎本はこれを拒否して討ち死に覚悟の徹底抗戦を通告し、そのとき“海軍皇国無二之書”が灰燼に帰するのは忍びないと、新政府の海軍提督に渡すようにと送ってきた。この本は榎本がオランダ留学中に入手し、自身の脚注が挿入された「万国海律全書」という国際法の書で、今後の日本のために役立ててほしいという願いが込められていた。榎本の非凡なる才能に驚き感服した黒田は、有能な人材が失われるのを回避させるために説得を続け、五稜郭の箱館政権を全面降伏させた。新政府の木戸孝允（桂小五郎）は榎本の極刑を主張するが、黒田や大久保利通の助命嘆願によって、伝馬町の牢獄に収監された。榎本は二年半後に特赦によって出獄し、明治五年北海道開拓次官になっていた黒田の下で開拓使として出仕した。明治七年には駐露特命全権大使として、樺太・千島交換条約を締結している。内閣成立後の活躍は目覚しく、初代逓信大臣、農商務大臣、文部大臣、外務大臣を歴任し、また北海道開拓使在任中に農業の重要性を痛感した経験から育英黌農業科（現東京農大）を創設し、科学知識を生かして初代電気学会会長も務めた。足尾銅山鉱毒事件では私的に現地を視察して、それまでの政府見解をひっくり返し、調査委員会を設置して改善命令に取り組んでいる。

榎本武揚。

榎本の生き方には、「二君に仕える武士にあるまじきオポチュニスト」（痩我慢の説：福沢諭吉）といった批判がある。多くの幕臣が明治政府に出仕する中、榎本が元幕閣であったことや、新政府の閣僚に就任したことへの批判であった。しかし教育者としてはいざ知らず、榎本の科学知識や語学力は批判した福沢とは桁違いであったことは明らかで、その学識を土台とした高い能力を、日本のために役立てることが出来たのは有意義であったといえよう。市民から「明治最良の官僚」と謳われたことによっても、榎本の真摯な仕事ぶりが窺われる。

勝海舟に翻弄される幕末史

福沢から同じように批判された幕末の英雄、勝海舟の扱いには非常に厄介なものがある。明治政府の勝に対する厚遇と、彼の日記及び氷川清話などで吹聴した談話から、数々の伝説が生まれた。それに惑わされ、勝が非職だった時期の出来事さえも彼の事跡とする史家もいる一方、そうしたことを

勝海舟

一切否定する説も枚挙に遑がない。勝が陸軍総裁として旧幕府の執行部に抜擢されたのは江戸城明け渡しの僅か二ヶ月前であり、勝が幕末の日本を動かしていた、などとする説には確かに首を傾げざるを得ない。勝は軍艦奉行として都合三年ばかり海軍に籍を置いていたが、活躍の中心は松平春嶽の下での政治的調停や交渉であった。勝の日記や談話には、他の様々な資料との整合性に多くの齟齬が生じているのが現状であり、細部まで検証しなければ、その評価は難しい。

明治に入ってからの勝は、新政府から朝幕間の調停に功があった見返りに海軍大丞（四等）就任を打診されるがこれを蹴り、明治五年に海軍大輔（二等/次官）を受け、翌年海軍最高職である海軍卿（一等/大臣）にのぼった。しかしどういうわけか海軍卿を一年足らずで辞めてしまっている。まだ働き盛りの五十三歳であった。のちに子爵授与を蹴って伯爵を受けたこともあるので、勝は職務より官位が欲しかっただけという評価もあるが、それだけではなかったように思える。海軍卿時代、勝本人によれば、仕事を部下に丸投げして判子を押すだけだ、と述べている。政治的斡旋や交渉は得意とするが、海軍テクノクラートとしての高度な技術知識には疑問符がつく勝にとって、配下は優秀な海軍技術士官ばかりで、海軍卿の椅子は居心地が悪かったのではないだろうか。

長崎海軍伝習所時代、数学などの素養がない勝は、厳格な教官ライケンにとって紛れもなく成績不振者であった。留年して二期からの新教官カッケンディーケには生徒との調停役として随分重宝がられたが、練習航海の選に漏れたりもし、結局三期まで卒業出来ずに伝習所に留まった。生徒監（学生長）として教育にも携わったと説明する史家もいるが、旗本出身者は全員艦長候補として生徒監に任命される決まりであった。

勝は幕府にこだわらない姿勢で自由闊達に未来を語り、多くの若者を魅了したが、彼の無責任な法螺話から虚像が一人歩きしている部分も多い。勝は巧みな話術による調停にこそ真骨頂があり、それを正しく理解しなければ、真の魅力さえも見失ってしまう。

小野友五郎のその後

慶応四年六月二十八日、伝馬町の牢獄から徳川主家預かりとして出獄した小野友五郎は、駿府に隠棲した。明治になって小野の実力を知る海軍から出仕命令が何度も出されたが、小野は謹慎中の身を理由に固辞し続けた。ところが民部省の要請に応じて出仕し、長州出身の伊藤博文や山尾庸三、井上勝の下、鉄道事業に関わることになった。航海士として天測技術は世界トップクラスの実力を持つ小野は、その能力を新時代の鉄道敷設に生かすことになったのである。まず横浜～六郷川間の測量に従事し、その後は鉄道候補路線の鉄路敷設適地を探って、日本全国を視察して歩いた。その間、木曾街道視察中に、初等教

小野友五郎

育から珠算を廃止して筆算だけになるという文部省の布告を聞きつけ、急遽東京に戻って文部卿の大木喬任に珠算の必要性を建言した。この建言により文部省では珠算を廃止しないことを決め、これは昭和になるまで続いた。小野は天文学やオランダの航海術書の翻訳を振り出しに、和算は国内最高権威者の一人として知られ、洋算においても長崎海軍伝習所でライケンから個人的に微積分や高等代数学を習った第一人者であったので、彼の意見の影響力は大きかったといえる。

鉄道局を六十二歳で引退した後は、ライフワークとなる製塩事業に力を注ぎ、また数学教育書の執筆に係わった。

明治三十一年、明治天皇の直裁が下って、病床にあった小野友五郎に「緑綬褒章」の下賜が決定され、長年の労が報いられることになった。十月六日、小野は日本橋の自宅で斎戒沐浴して褒賞を受け、その三週間後に八十二年の天寿を全うした。笠間藩士として幕府陪臣という軽輩からスタートして、咸臨丸太平洋横断航海で実力をみせ、二度目の渡米ではジョンソン大統領や次期大統領グラント将軍と会見。幕末には内膳正を任官して幕府勘定奉行並にまで昇進した。明治期の活躍と合わせ、休む暇もない働きづめの、波瀾に富んだ人生であった。

明治二十年代から日本建国以来の功臣二千余名に対する贈位が順次開始され、小野に対しても死後二十年経った大正七年、大正天皇から正五位が追贈された。幕末の海軍に対する功績が理由であるが、この追贈によって、勝ら幕府新執行部によって鳥羽伏見の戦いの責任を負わされ、スケープゴートとなって入獄したことが如何に不当なものであったかが証明されたといえる。旧幕府臣下の追贈は四名。小野のほかは川路聖謨、岩瀬忠震、池田長発といった、このシリーズ一回目に登場した開国や外国との条約交渉に功績あった有司たちである。

日本海軍の終焉

日本の海軍は安政二年（1855）、オランダの協力による長崎海軍伝習所開設と軍艦購入をきっかけに幕開けを迎え、幕府や諸藩によって築き上げられてきた。明治政府に引き継がれ帝国海軍となって日清、日露の戦役を戦い抜いたが、昭和十七年六月のミッドウェー海戦で思わぬ大敗を喫し、同十九年六月のマリアナ沖海戦と十月のレイテ沖海戦によってほぼ壊滅した。続く十一月に横須賀で建造された世界最大の空母「信濃」が、潮岬沖で沈没されるに至って艦隊としての海軍は消滅し、九十年に亘る栄光の歴史は幕を閉じたのである。

（終）

日本海海戦に於いて旗艦三笠の艦橋で指揮を執る東郷平八郎。ロシア・バルチック艦隊を潰滅させた連合艦隊司令長官・東郷平八郎は、小栗の遺族を自宅に招待し「この勝利は、小栗上野介が横須賀造船所を建設してくれたお蔭。」と礼を述べ、書を揮毫して贈った。

連載を終えて

日本の近代化が始まったのは明治にあらず、幕末だった。その契機となったのが開国と遣米使節の派遣であり、使節の小栗上野介忠順が横須賀製鉄所建設に尽力して礎を築き、明治を迎えて横須賀から全国に近代化が広がっていった。こうしたテーマを主題に、遣米使節団が乗艦したポーハタン号に随伴した“咸臨丸”乗組員の母体となった長崎海軍伝習所出身の海軍技術士官たちの活躍を絡めて、幕末を描こうと思っていた。説明不足にならないようにと書き進めた結果、当初の予定の倍以上の長い連載になってしまった。なるべく正確を期すため様々な資料を参考にして、客観的に取捨選択することを心がけたが、⑩の中で載せた福沢諭吉の一万五千ドル横領の件は、福沢家で発見された覚書が偽書である可能性が出てきた。おそらく福沢の謹慎理由としては、私物荷物運賃千ドルの利得と公金五百ドルを持ち逃げされた計千五百ドル（現在の千五百万円）の責任と命令不服従にあったようだ。ここに訂正したい。

昨夏、この連載を始めてすぐ、山口県を訪れた。勤皇の志士たちのゆかりの地、萩や湯田中温泉などを巡った。明治の主役たちの故地を見ておこうと思ったのである。そうした観光地では、歴史案内員たちがおしなべて「長州は尊皇攘夷という素晴らしい思想によって維新を成し遂げた」と解説していた。これに対しわたしは「・・・？」と感じざる得なかった。なぜなら尊皇攘夷は倒幕派も佐幕派も関係なく、当時多くの日本人の基本思想であり、長州の専売特許ではないからである。長州は攘夷を実行するための下関戦争で、その無謀さを十分思い知らされた。また同時期に、攘夷すべき相手の列強（英国）に若者を密航留学させ、攘夷が不可能であることを悟った井上馨や伊藤博文が、長州に新しい風を吹き込んでもいる。

文久三年（1864）、長州の若者たちは英国に密航留学して世界情勢を見聞し、のちに明治時代の主役として活躍する。 前列左から井上馨（政治家・実業家）、山尾庸三（工部卿・法制局長官）、後列左から遠藤謹助（造幣局長）、井上勝（鉄道庁長官）、伊藤博文（初代内閣総理大臣）。

一般に幕末は分かりにくいといわれるが、その要因のひとつに、こうしたイデオロギーで語られることが多く、現実と乖離しているからであろう。極端に外国を嫌って攘夷実行を迫る孝明天皇と国際情勢を考えれば鎖港などの攘夷が不可能なことを十分承知する幕府や諸藩の開明派。それらを取り巻く攘夷を盲信する者や倒幕の手段に利用する者などが、複雑に絡みあっているのである。孝明天皇の崩御と、それにともなう兵庫開港によって、攘夷は事実上雲散霧消した。あれほど攘夷と騒いでいた岩倉具視たちも、明治新政府首脳になってからは、攘夷政策など一切おこなっていない。

明治の元勲について。

わたしは若い頃、夏目漱石を愛読した。漱石の「こころ」に描かれている主人公と御嬢さんは、明治の軍人乃木希典夫妻の投影であろうことはよく知られており、漱石との縁が乃木将軍に興味を持つきっかけとなった。長州出身の乃木は世界に名が轟く軍人であり、連合国最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥も乃木を「軍人の鑑」として生涯崇拝し、来日と離日の際に乃木神社に参拝した。乃木は自ら指揮を執った日露戦役で息子二人を前線に送り、二人とも戦死させている。乃木にとって身内を特別扱いするようなことは、もっとも忌み嫌うことで、ここに乃木という人間が体現されている。

その乃木将軍が、明治の元勲、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允を痛烈に批判しているのである。維新後、故郷の妻をなおざりにして、東京で豪奢な生活に耽った彼らを指弾した。奢侈や蓄財は後継の元勲たちに受け継がれ、政治家であるはずの山県有朋、井上馨、松方正義らは、長者番付けで豪商と肩を並べるほどに巨大化し、財力を武器に権力を掌握した。だからずっと、わたしは明治の元勲によい印象を持っていなかった。

しかしその反面、山県や井上のアジテーションにより、貧農に生まれ足軽となって士族社会の末端から出発した伊藤博文が、公卿のなかでも特に身分の高かった三条実美を抑えて初代内閣総理大臣に就任したこの一点が、新時代到来の夜明けを感じさせる画期的な出来事ではなかったかと、いま思うのである。

あとがき

この連載では小説やテレビドラマでお馴染みのヒーローは、一切活躍しませんでした。その点、不満に思う方もいらっしゃったでしょう。しかし歴史の中に埋もれ忘れ去られた人々、ひたむきに働いてその生涯を日本のために貢献した人々を主役として描けたことを、わたしは無上の喜びとします。ご愛読ありがとうございました。